

壺井栄論(16) — 第六章 戦時下の文学(2) —

A Study of TSUBOI Sakae (16) : The Literature in Wartime (2)

鷺 只雄

SAGI Tadao

—

次に順序は前後するが、第八作品集『夕顔の言葉』(昭19・2・20 紀元社 A5判 松山文雄の装幀・口絵・挿画 収録作品—港の少女 あひる 甲子と猫 小さなお百姓 小さな先生大きな生徒 おみやげ 餓鬼の飯(A—児童) 夕顔の言葉)は児童文学作品を集めた最初の創作集であるが、本稿では以下、栄の戦時下の児童文学についてみておきたい。

栄は子供のことがわかり、子供のことが書ける資質に恵まれた作家であることについてはデビュー作の「大根の葉」が何よりもこのことを証明しており、実際に児童文学界からの執筆依頼も盛んであったことは『夕顔の言葉』刊行に明らかであろう。

無論、発表作品はこれにとどまるのではなく、既に述べたように

「まつりご(A—児童)」、「新ちゃんのおつかい」があり、島崎藤村編『新作少年文学選』のために「十五夜の月」を執筆するという具合に45年8月の敗戦前までに発表した児童文学作品は現在私が確認した限りでは全部で26作ある。

しかも戦争が激しくなり、敗戦が近づくにつれて、小説の発表は減少し、代って児童文学の方が量的に増加して両者の関係は逆転するに至るのであるが、その事情・理由については後述する事として、とりあえず『夕顔の言葉』収録作品から見えてゆくことにしたい。

二

「港の少女」(昭17・7 「少女の友」)は小豆島の港の売店ミドリヤで小学生のケイ子と祖母は商いをして暮らしていた。母はなく、

父は二度目の出征中。ケイ子には忘れられない二人の客がある。一人は一級下の春江が祖父母の許で暮らしていたが、祖母の死で高松にいる母の許へ祖父に連れられて行くのを嫌がって柱にしがみついたのを、無理矢理ハガサれるようにして行った姿。もう一人は十一歳だというが、七つか八つにしか見えない少年が、首に行き先を書いたボール紙をぶら下げていて、伊賀の上野に行くという。ケイ子のお婆さんは余りのいたわしさに、ウドンを食べさせ、夏みかんを二つもたせ、50銭札を一枚やり、弁当にとイナリズシをもたせるなど世話をやいて送り出したことである。

港は出会いと別れの間であり、人生の縮図であるから、さまざまのドラマがあることは予想されるが、最初の春江の例はピンと来ない。伏線の張り方に不足があるように思う。これを後にうまく使ったのが「二十四の瞳」で、産後の肥立ちが悪くて母を失い、小学五年生になる時に売られた松江の時には効果的に使われていて衝撃的である。全体的に作品のまとまり、完成度という点から見ると、構成にルーズさが見られ、ゴチャゴチャしている点に難が見られると言つてよいであろう。

「あひる」(昭16・6)〔三年生〕 初出原題は「親あひる 子あひる」は村の小学生たちはおやつのかきかしたさつまいもの残りを校門の橋の下にいるあひるにやるのがいつもの事。秋男がいたずらしてさつまいもをあひるにぶつけたところ大騒ぎ、翌日は6羽いたのが4羽となり、あれで死んだかと心配すると、2羽売ったことがわかりホッとす。子供と動物のふれあいをささいな出来事を通してやさしく描いたもの。

「甲子と猫」(昭17・2)「少国民の友」は小学生の甲子と二匹の

猫のかかわりを書いたもので、黒猫のエチは引越しの時にいなくなり、今度は小犬程もあるトラ猫がいつか、おしつこのしつけがないので甲子の留守に原っぱに捨てると、それを知った甲子が余りに悲しむので、女中と母と甲子で行って見ると半日たつても捨てられなかったところにすわっていた。淡々と事実を叙述し、感情は排するといふ突き放したスタイルで書かれている。

「小さな百姓」(昭17・7)「少国民の友」は小学校低学年の夏子が父の出征のため母を助けて子守や農業の手助けをする話。そこまではどこにでも、いつでもある話したが、榮は子供に一層やる気を起こさせようと、「夏子の畑」と区切りをしてやり、また農作業の意味を一つずつ説明して理解させながら進む。例えば、下草したくさをやるのは(1)日照を避けて枯れるのを防ぎ、(2)雑草の生えるのを押さえ、(3)腐れば肥料になるといふうに、具体的に教える所に示されているであろう。

「小さな先生 大きな生徒」(昭16・10)〔六年生〕は禎子(12歳)の母に近く子供が生まれるので人手がほしいのだが、あいにく無くて困っている所へ朝鮮で暮らしていた叔母(文中では「伯母」と記すが、彼女自身、禎子の母を作中で「姉さん」と呼んでいるので「叔母」が正しいと思われるので、そう表記する)の紹介で朝鮮の少女がやって来る。十五歳で身寄りが無いというが、明るく素直で仕事のみこみが早く一家は大喜び。その上向上心もあつて仮名は叔母に教わつて既にマスターし、今度は禎子に毎日一字ずつ漢字を習うという模範生の話で、絵に書いたような日鮮融和、内鮮一体化の話と表面的には読めるが、少女の突きつけるものは深く重い。それは名前を問われて「この間まで朴禎順と申しましたけれど、今

は創氏しまして、清原と申します」という〈創氏改名〉の問題であり、これこそは「日本の朝鮮支配政策の中でも、もっとも朝鮮人に苦痛を与えたものの一つ」であったからである。

朝鮮には元来「族譜」なるものがあり、何家の、何代の、何番目、という血統証明書によって一族意識、同族意識が極めて強固であり、加えて朝鮮の家族制度の三大鉄則、「姓不変」（姓は一生変わらない）、「同姓不婚」（同族の者同士は結婚しない）、「異姓不養」（同族でない者は養子にしない）、によって朝鮮の姓は結婚によって変わることもなく、戸籍を移動してもそのままであり、一生不変である。

そこへ家族法則の内地化と徴兵制の実施をめざす皇民化政策が交差した一九四〇年に創氏改名政策が打ち出され、強力に推し進められて行った。法的に強制はなかった。しかし一九四〇年二月に実施が開始され、その月には実施率が〇・三六%であったものが、それから半年後の八月には全世帯の実に七九%に及ぶ実施率に至ったという背景にはあらゆる過酷、没義道な手段を使っても押しつけるという凶悪な意図があった。その手口を少し記すと、「創氏改名」の届出をしないと、入学、進学を拒否する、児童に教師が叱責殴打する、総督府機関に一切不採用、現職者も漸次免職、行政機関にかかわる事務を取り扱わない、配給対象からははずす、荷物の輸送を鉄道や運送店で取り扱わない、等々であった。

ここまで非道の限りを尽くして実施したこの政策の根本的な狙いはどこにあったのかと言えば「朝鮮人の一族意識、同族意識を解体して、天皇家を宗家とする家族制度の確立と徴兵制の充実にあった」と言われるが、実施後五年、日本の敗戦でもろくも崩壊した。

榮はこの作品の発表される一年ちよつと前、昭和15年6月に朝鮮

総督府鉄道局の招待で、佐多稲子と二人で半月程朝鮮を旅行し、その時の印象を戦前に三つ書いている。いずれも官製の招待旅行であり、宣伝吹聴を期待されたものだけに、みるべきものがないのは当然ながら、しかし露骨に宣伝のピエロ役を演じていたわけではない。というよりも、「創氏改名」についてはつきりこう書いていたことを明らかにしておきたい。「朝鮮の思い出」の中で、朝鮮の変化の激しさについて聞かされ、榮の朝鮮旅行は一年半も前であり、今年もまた朝鮮に足を向けた佐多氏の話も聞いてもそんな気にさせられるが、「京城でお目にかかった女の方たちがみんな日本流に創氏されたということなども、何となく胸にひびくものがあった、例えば新聞の婦人記者をしていられた田さんが、田村芙紀子さんになったと聞かされても私の頭にはやっぱり以前の田さんとしての姿より浮かんて来ないので、私の頭がおかしいのだろうか。ところが私の小さな感懐などお構いなく、朝鮮は変化しているのである。進歩であるのかもしれない。」と榮は言う。昭和15年2月11日から8月10日までの6カ月以内に「創氏改名」の届出はしなければならなかったのであるが、それに対して榮は、ヘンだ、違和感がある、それともそう思う私の「頭がおかしいの」かとハッキリ記している。勇気ある発言と言わなければならない。

この姿勢が「小さな先生 大きな生徒」における朝鮮の少女の「創氏改名」という事実があったのだという発言をさせたものであり、それ以上の発言はタブーであった。

従って、戦争が終ってタブーがなくなった時、榮は掌編小説「みやまれんげ」（昭27・3・16「婦人民主新聞」）の中で、日本に支配されていた妓生たちについて、次のように言う。

私は、あの時ほど日本人であることに一種のひけめを感じたこととはありません。歌を所望すれば歌い、踊りをといえばすぐ踊る彼女たちが、私たちに向ける目は決して歌っても踊ってもいいのです。石のように固い表情、氷のように冷たい目の色、その彼女たちの抵抗を包んで、美しい単色の朝鮮服だけが意志のない踊りを踊っていた、と私は思うのです。そのころ朝鮮を旅した日本の男の人たちはそれに気がついていたでしょうか。あれが女であるための私の思い過ごしであったとは、どうしても思えません。招待された旅であったために、女である私たちの席へまで、妓生を呼ばねばならぬと考える招待者側の歓迎ぶりは（中略）今もって私の記憶の中に辛い思いの尾を引いているのです。まして妓生たちの思いは、火となって燃えるより氷となって沈んでいたろうことを思わずにいられません。

栄の朝鮮におけるこの妓生体験はその後約十二年経った今でも「辛い思いの尾を引いている」わけで、この点をヌキにしての戦争責任批判は有効ではない。詳しくは後述することになるのでここでは簡潔に述べるが、世間によくある戦中の言動を引き合いに出して戦後のそれを批判するやり方、あるいは戦中の言動には沈黙して口をぬぐってひたすら戦後の時流に乗っているのをあばきたてて批判するやり方には率直に言って賛成できない。勿論、過去の言動の資料収集の意義は重要であり、その点の評価をするのにやぶさかではないが、しかしこれらの方法では結局の所、一億総懺悔になっただけで生産的ではない。

従って、個人としても、あるいは歴史としても、重要なのは戦時中の負の遺産を背負って戦後をどう生きて行ったか、その軌跡を検

証する事であろう。

その点で戦時中に「創氏改名」の理不尽さに憤激しつつも有効適切な反撃をなしえなかった無念さを、戦後に持続させて作品を成した執念に敬意を表しておきたい。

三

「おみやげ」（昭17・1「三年生」）は母のお産見舞に田舎の祖母が新三とやす子の家に田舎のおみやげをいっばいもって訪ねて来て、赤ん坊が生まれ、母が丈夫になってから帰るまでを描いたものだが、おばあさんにも、子供たちにも特徴がないため、事のてんまつを記すだけになってしまっているようだ。余談だが、この祖母には栄と親交のあった小林多喜二の母の面影がある。

「餓鬼の飯（A—児童）」（昭16・7「少女の友」）は小豆島の風習を描いたもので、十歳から十四、五歳の少女たちが、二、三人から四、五人ずつ組んで、お盆に一日台所をあげてもらって材料を持ちよって料理を楽しみ、大人は口出しをしないという、女の子たちにとっては大昔から続く楽しい行事。咲子・初代・杉子・正子の四人はこれまでに咲子↓正子とまわり、今年は杉子の家の番、咲子は去年病気で参加できなかったの今年で今年は張り切って一番にかけつけると、正子から初代が熱を出して来れないと聞き、ガッカリ。三人は五目ずしをメインディッシュに、白玉だんごもつくることにするが、だんごに気をとられてご飯がこげ、水も不足して失敗。杉子の母が消し炭を入れてこげの匂消しをしてくれるがダメなので炊き直すと、今度は水が多すぎてオカユのよう。母が水気を逃す方法を教

えてくれ、三時過ぎに完成。五目ずし・白玉だんご・スイカをもつて初代宅に行き、ゴハンがオカユになつたとわびると、初代の母は、病人だから助かると言ってくれたので三人はホッとすする。

これは少女から大人になるための通過儀礼と言つてよいもので、本人も周囲も大きな楽しみとしていたものである。当日は一日台所をあけて娘にまかせ、大人は口出しをしない―そこに献立を考え、材料をととのえ、料理を作る―この年代の背伸びしたがる少女たちの自立を助け、育ててゆく上で最良の教材と言つてよいもので、主題・構成・表現のあらゆる面から見て傑作と評して過言ではない。

鳥越信氏はこの作品に「時代へのプロテスト」を見、その理由として(一)欲しがりません勝つまでは、の時代に、好きなだけ食材を持ちより、(二)しかも自治遊びをとりあげているところにファシズム批判があるとすする。

収録作品の最後は「夕顔の言葉」(昭18・3「日本少女」)。前川ヤス子は高等科一年で、将来は師範に行つて先生になりたいと思つているが、兄は戦死し、母は魚の行商でかつが暮らしている現実から考えて会社勤めをしようとする、母は反対し、兄さんは貧しくて自分が勉強ができないのがくやしかったからヤス子にはさせたいといつていたのだからと言われて行くことを決心するという心やさしき少女の物語であるのだが、肝心のヤス子の決心の部分が弱いというか、モタモタしているのが惜しまれる。次に『石』に収録されていた「ともしび」について論じておきたい。

四

「ともしび」(初出未詳。昭和17年7月以前の作)は島(小豆島と思われる)の漁師の娘ヒサノが小学校六年になる時神戸の母方の伯父の養女となつた一年間を描く。初めは養母の過剰な厳しき、とりつく島もないあいらいにとまどうが、養父が養母への不満を爆発させてヒサノを島に戻すといつた時にヒサノは養母の胸にとびこんで感動させ、以後は、日一日と母娘の關係が深くなり、ヒサノの姉ナミ子が月二回の休みの日を雨の日もいとわず、ヒサノの様子を見にくる(迷惑を考えて逢おうとはしない)情愛の深さに養母は気づいて心うたれる。ヒサノが養女になつて一年後、養父がヒサノを島に戻そうとした時には、養母とヒサノの間は磐石となつて揺るがず、折から母の妊娠がわかつても同様で、生まれてくる子を一人っ子のわがままものにしたくないからと言わせて、父にあきらめさせるのである。

これは何の変哲もない作品といつてよいであろうが、しかしこれが凡作でない所以はヒロインの素直さと情愛の深さにある。

これは「もらい子」の話であるから、当然生母の悲しみ、養母のわがまま、伯父の身勝手、級友の意地悪、姉のせつなさ等々がからみあつて複雑な展開を示すのであるが、いざと言う時にそれらを快刀乱麻を断つように見事に解決してくれるのはヒロインの前述の性情なのである。その意味でこの作品は素直さの勝利、あるいは情愛の頌歌といつてもよいかもしれない。

これまでこの作品は殆ど評価されず、見捨てられたままであつたが、大いに評価されてよい作品である。無論、欠点はないわけでは

ない。その最大のもの、養母のヒサノに対する内心の変化の過程がもう少し、具体的な事実即して描かれれば猶良かった、ベターであったといえるかもしれない。現在のままではややご都合主義的との謗りを受けないとも限らないからである。

ところで、この作品を絶讃する評論家に江藤淳がある。栄の死後まもなく書かれたもので、青春期病中の愛読書であったとして次のように評している。原文は約五枚（400字）のものであるが、抄出した。

壺井さんを悼む。 江藤淳

六月二十三日、永らく病床にあつた壺井栄氏が逝去された。

（中略）。

しかし私は、いまだにその壺井さんの名作「二十四の瞳」も「襦袢」も読んでいない。つまり私は、職業的な批評家としてこの女流作家の作品を読んだと言う記憶がない。ただひとつ、私のなかに鮮明な印象をとどめているのは、たしか「灯」という表題の作品である。白っぽいフランス装の本で、中学生だった私はそれをなにかのはずみに古本屋で買った。作者がどういう経歴の人で、文学史的にどういう位置にいるのかということについては、もちろんなにも知るはずがなかった。

それにもかかわらず、この「灯」（たしかそういう表題だったと思う）は、私には忘れられない本になった。私はそれを幾度もくりかえして読み、特に結核で寝ていて暗い気分になって来ると、熱っぽい身体が清潔なシーツを求めるように、この「灯」の頁を開いて静かな充足した気持をとり戻した。これほど愛読した本をどこかに失くしてしまったのは、私が引越しばかりしていたため

にちがいない。しかしなぜこの小説がこれほど心に残っているかは、いまだによくわからないのである。

「灯」の筋はちよつと「小公女」に似ていて、小豆島の貧しい家の少女が、東京に住んでいる遠縁の親類に引きとられて、子供のない夫婦の養女になるという話である。つまりなんの曲もない家庭小説で、深刻な哲学も人性の危機めかした道具立てもないのであるが、主人公の少女の素直さと適応力が鮮やかに描けていて、ひとりの田舎出の娘が都会のかなり恵まれた家庭の娘に変身して行く過程に、静かな生命の讃歌とでもいふべきものが流れているのである。

私はそのとき、きつとその生命の讃歌を求めていたにちがいない。そしてまた「灯」に、ある澄んだ幸福感がひそんでいるのが好きだったのにちがいない。あまり明るいとはいえない環境で、病を養っていないければならなかった私は、やはり幸福感というものを欲していた。それが実生活から来なければ、文学か音楽から来るほかはなく、「灯」は非常にささやかなものであったが、それを確実にあたえてくれるので、忘れられない本になったものと思われる。

だから壺井さんは、私にとってはこの「灯」の作家であるというほかには、なんの交渉もない人であった。（中略）

私のなかに「文壇」の習俗に対する抜きがたい偏見があるのは、「灯」のみならず幾人かの作家のいくつかの作品について「文壇」というものの存在すらろくに知らないうちにこれに似た体験をもつたことがあるためかも知れない。たとえば谷崎潤一郎の初期の作品や高浜虚子の小説「俳諧師」、あるいは伊東静雄の詩集「反響」

などは、いわばなんの紹介もなしにある偶然から私の前にあらわれ、読みかえすたびになかをあたえてくれた。それはかならずしも幸福感と呼べるようなものではない。しかし文学の本質に触れたなにかであることはたしかであり、そのことを考えると私はローレンス・デュレルの「クレア」で語られている「ピクウィック・ペイパーズ」の挿話を思い出さぬわけにはいなくなる。それは第二次大戦中、北阿戦線の英軍兵士のあいだで、ポロポロになるまで廻し読みにされるディケンズの小説の小型本の話である。この「ピクウィック・ペイパーズ」は兵士たちにとっての唯一の「図書館」であり、彼らは砂漠の星空の下に寝ころがって、お互いに朗読しあっては「死」に直面している自己からの解放を味わう。これは文学が人間の心にあたえ得るものを確認する感動的なエピソードである。

壺井さんの小説が、私がそれを必要としたときに私にとっての「ピクウィック・ペイパーズ」の役割を果たしてくれたということとを、この機会に書きとどめておきたいと思う。

江藤淳は中学生時代の記憶というが、記憶は流石であって殆ど誤りはない。ただ、ほんの一、二の記憶違いを正しておく、ともしび」が収められている作品集名は『石』である。ヒロインは島（厳密には「小豆島」ではないが）から「東京」ではなく、神戸の親類の養女になったというのが正しく、誤りはこれだけである。

「ともしび」を少年江藤淳が「愛読」して「くりかえし読」んだのは、作品に流れる「静かな生命の讃歌」を「求めていたからにちがいない。そしてまた『ともしび』に、ある澄んだ幸福感がひそんでいるのが好きだった」のにちがいない。特に「結核で寝ていた」

少年は「やはり幸福感というものを欲していた」に相違なく、「ともしび」は「ささやかなものであったがそれを確実にあたえてくれるので、忘れられない本になった」のだといつてよいであろう。

更に彼は彼と壺井栄の小説との関係が、「文学の本質に触れたなにか」であり、それはあたかも、デュレルの「アレキサンドリア・クワルテット」の一つ「クレア」の中で語られる、C・ディケンズの小説「ピクウィック・ペイパーズ」と北アフリカ戦線における英軍兵士とのかかわりに見られる感動的なエピソードと同じものであり、「ともしび」は江藤淳がそれを必要としたときに彼にとっての「ピクウィック・ペイパーズ」の役割を果たしてくれたとまで評価しているのが強く印象に残る。以下、発表順に見てゆくことにしたい。

五

「新ちゃんのおつかい」（昭16・8「怒三年生」、のち、『朝夕の歌』昭22・10・15 紀元社刊に所収）はあわて者のおつかいの失敗をユーモラスに描き、「十五夜の月」は島崎藤村編の『新作少年文学選』（昭17・5・25 新潮社）に書きおろして収録されたもので、八十五歳まで長命であった祖母（実在の祖母は八十二歳で没）の思い出を語って余韻嫋嫋たる作品である。栄の人間形成の上で、また作家としての基盤形成の上で最も影響する所の大きかったのは既に何度かふれたようにこの祖母で、話好きで沢山の昔話や伝説を語り、子守唄を唄って倦むところがなく、その最も熱心な聴き手が栄であり、最もかわいがられて祖母の隠居所で育った。従ってその祖母を

追想する筆先は限り無く柔らかであたたかい。

「大荷はうち」(昭18・2「少国民の友」)は小豆島(と断じてよい)の節分の風習を描いて簡明である。一つは氏神様はじめ、荒神様、明神様、恵比須様にお参りしていり豆、赤飯、大根なます、ごまめをお供えすること、二つめは棒飴で、氏神様の下の菓子屋から買ってきて、豆まきのあとに、こたつや火鉢にあたりながら大人も子供も細長く延ばしながら食べるのがならわしで、長寿祈願の縁起物であったのだが、戦争が始まってからは飴は無しになってしまったこと。それからもう一つ、復員後に米屋から便利屋(運送業)に転業した父は豆まきの最後に商売繁昌の縁起をかついで、「大荷はうち」と大きな声を出す。いずれも理のある風習で伝来の意義が得心されるのである。

「めがね(B―児童・克子もの)」(昭18・5「少国民の友」)はいわゆる「克子もの」で何度目かの手術後で虫眼鏡のように厚いレンズの眼鏡をかければ見えるのだが、肩が凝ること、何よりメクラと言われるのがイヤでメガネをかけないで失敗をくりかえすカツ子の話。泣かずに強情を張り通すところにそのレーゾン・デートルを見出しているわけで、その点で戦後に書かれた「右文もの」に共通する性格を持っている(この点についてはのちに「右文もの」の項で後述する)。

「おるすばん」(昭18・6「少女の友」)は父は船員、母は小学校教師で祖父に育てられた和子には祖父との思い出が沢山あり、毎日昼と三時には授乳で学校に通い、山ヘドングリの木を植えに行ったり、海へ泳ぎに行つて溺れかけたこともある。夏休などの休みはいつも旅に出て親子三人の楽しい旅行であり、蓄音機でもミシンでも

父は何でも和子に買つてくれたが、母は和子が六年生の時に体をこわして寝つき、父は船員をやめて看病するが二年で没、一年後に父は応召で再び船に乗るが、帰還して来た時にはあつと驚かそうと祖父はみかん畑を、和子は母もも子にちなんだ桃の木を育て始める―内容は全て回想であり、しかも和子の幼時の船員一家のそれであつてその意味では小豆島ものの典型的なタイプと言つてもよいかもしれない。

「故郷のにおい」(昭18・10「少国民の友」)小五と小一の姉弟を中心に、一家で戦地にいる兄への慰問袋作りの過程を具体的に描き、キーワードは「故郷のにおい」としてひたすら明るい。

「おふねのともだち」(昭19・1「コドモノクニ」)は、のぶおの父が戦争にとられない時には村の沖を通ると、汽笛を三度鳴らして通過し、母子は日の丸の旗をふつて合図をした、望遠鏡で見ると父もやはり望遠鏡でこちらを見ていた。御用船にとられてからは父の船は一度も村の沖を通らないが、のぶおは沖を通る父の友達船に旗を振り続けた。

船員の家族の心の交流を描いて胸をうつものがあり、父の船が通らなくなつてからも旗を振り続けるのぶおの姿には戦争のむなしさが漂つていよう。

「妙貞さんの萩の花」(昭19・3「少女の友」)は女学校二年生の萩江家には古い巨株の見事な萩があり、茅花(父がハワイ帰りの金持)、菊乃(醤油屋で有名な金持の家)と萩江(母子家庭で、母は便利屋で辛うじて生計を立てている)は一年生からの仲良しで、それだけに萩江への周囲のねたみは強かつた。

秋の学芸会で「妙貞さんの萩の花」という題で作文の朗読をした。

今から五、六十年も昔、ひいおばあさんのいた頃、妙貞さんは村に住みついて無料で産婆の役を果たし、女たちに読み書きを教え、相談ごとに乗る、村人から絶対的な信頼を得ていたので妙貞さんは警察からも守られて他界し、村人は洞窟の入口に墓をつくり、萩を植えてお産の神様としてまつた——萩江の生母は産後三日目に死に、父は戦死、祖母を大きくするまで母と違って育った。母はもうすぐ60になるが、便利屋で疲れて帰る姿を見ると学校などやめて車のあとおしをしたいと思うが、母は学校だけはでてくれといつてきかない。貧乏な中で学校に出してくれる母の心を身に沁みて感じて、妙貞さんの萩の花のように大切に育ててゆきたい（嗚咽で読めず、中断して降壇）——校庭で茅花、菊乃が来て妙貞さんも母も皆本当の事と聞いて驚く。

萩江は母の事をチリンチリンと馬鹿にされるけれど、他人からは軽蔑されても私は母の仕事を立て派だと思っている、その事をもう少し最後に読みあげたかったのだが、書いた字が読めなかったと語り、三人は次の日曜に妙貞さんの墓参りに行くことにした、というもので、職業に貴賤はなく、働くことの貴さ、大事さというシリアスなテーマを直截に、感動的に表現して見事である。年頃の女学生にありがちな、お体裁や見栄からの羞恥心を勇敢に、きれいさっぱりかなぐり捨てさせて「母の仕事は立派だ」と堂々と主張させ、友人との絆も一層深めさせて畏敬の念を更に強くさせているのも見事である。

次は「海のたましい」（昭19・6・14 講談社）であるが、長篇であるのと、改作という問題もかかえていて、長くなるので、最後にまわして論じることにした。

「馬追日記」（昭19・7 「少女の友」）は一番初めに飼犬の太郎が軍用犬として招集され、次いで兄の澄夫が子馬の東垂号を飼うと村中の人気者となり、兄が予科練に入ると妹の静子が代って世話をし、軍馬としての応召を待つ、という典型的な奉公小説で、犬でも馬でも何でも戦争に役立つものは片端から徴発、寄付させたのである。その際、作者の手柄として期待されたのは嬉々として喜んでご奉公にのぞむことであり、その意味ではこの作品はその責を果たしているであろう。

「おばあさんの誕生日」（昭19・10 「少女の友」）は村の旧家の祖母がモンペや勤めを毛嫌いのを、孫娘が弁舌巧みに丸めこんで、工場へ初出勤する日には祖母がモンペをはいて見送るといふふうにし洗脳するまでに至るプロセスを描くが、その間において新旧思想の対立、考え方の相違等をこえて、父の食料品会社への入社を解約して、兵器工場に女子挺身隊の幹部として入ることになる。その意味でこの作品はまぎれもなく、戦争協力推進小説であるのだが、しかし次のような部分はどう解すればよいのであろうか。

孫娘の挺身隊としての入隊に対して「迪子さんのような村の有力者の家の方が進んで挺身隊に入って下さることで、あとの勧誘がどんなにうまくゆくか知れませんが」と女子青年団の団長や職業指導所の人から感謝されたのに驚くと同時に、「自分自身にそれだけの力があるのでは勿論ないにしても、村の女子青年を一人でも多く挺身隊に加わらせることに役立つとしたら、先ず第一番に参加しなければならぬと考えた。」

田舎で挺身隊というような自己放棄、あるいは自己捨身の苦役に誘いこむためには地方名士の子女の入隊を利用するのが鉄則であるわけで、それがうまく行ったのがこの場合であるが、しかし、これは裏話、かげに隠しておく話であって表には出したくない話である。それが表に出されたままに放置されているということは、そこに作者の明確な意図が露出されていることにはほかならないであろう。為政者の言動を利用してその企図を巧みに暴露してみせているといつてよいであろう。

「露草」(昭19・11「少女倶楽部」)は東京鷺宮(と推定される)の八幡様の森かげの隣組では老人と子どもが多いところから共同防空壕を作り始め、早朝一、二時間の作業で六〇日間、百人収容のもの完成し、千代子と勝子は防空壕内で子守をしようと話し合う。

これは国策協力というよりも、自分たちの生命を守るといふ、自衛のための共同事業であり、そのための方策―時間のとりかた、労力の提供のしかた等に工夫があつてこの種の仕事をする場合には参考となることが多いと思われる書き方であり、その点で単純に戦争協力と素材から断罪できない作品であろう。

「鶏と南瓜」(昭19・7「少女倶楽部」)は正子(小学六年)の母が病氣の時、隣家の小母さんから何度も生みたての卵をもらつて丈夫になつた。その後正子一家は防空用地を作るため酒屋の二階に転居したが、そこで正子は窓の外の出窓に箱島を作つて南瓜を育てたところ大小八つもなり、一番大きいのは七キロもあつた。それを半分に切り、卵をくれた小母さんの処に〈特配よ〉と持つていって驚かす。

戦時下の悲惨な状況―飛行機工場で働く兄は疲れ切つて帰り、防

空用地を作るために強制疎開があるというように困難な状況の中でも、箱畑のように、工夫しさえすれば七キロの南瓜もできるという見本を示せという注文で書かれた戦争協力作品である。

「千代紙」(昭19・9「少国民の友」)はひろ子の父に召集令状が来て、あさつての朝八時までに入隊しなければならぬのだが、あいにく父は今日東京出張で上京中、電報を打つても瀬戸内海のこの島では間に合わないで直接入営ときまつたが、果たして間にあうか―テンヤワンヤの一家の騒動の顛末を事実だけを淡々と描いたものだが、おのずからそこには赤紙なるものが、如何に無理無体に国民をひきずりまわし、不合理で、暴力的に駆りたてるものであつたかを逐一証拠だてることになっている。

誤解のないようにもう一度繰り返すが、これは表面的にはアカガミを受けた一家の入営までの騒動を描いたものであり、その点で忠良な臣民としての一般的な姿を描いたもので、そこには非難されるべき点は全くない。

しかし、前述のように〈赤紙〉批判がでてくるのは、当事者が入営までに真剣になればなる程日限がギリギリであり、準備する時間が絶対的に不足していきり舞をさせられるからにほかならない。ひろ子の父も八時直前に門前に着き、家族の顔を見ただけで、弁当も身の回り品も一切もたずにかけてこんだのである。召集令状の非情、不合理な期限に対するプロテストがおのずと示されていよう。

「山茶花」(B―児童・正子もの)(昭20・1「少国民の友」)は東京から両親の故郷小豆島へ疎開した病身の正子(小学四年)が、裏の同級生の靖子と一緒に遊び、靖子の家は農家なので、その手伝いをするうちに風邪も引かない程丈夫になつていたというもので、

本来、正子は集団疎開で信州の学校へ行くことになっていたのだが、病弱で殊に冬になると風邪ばかりひいている正子には雪国の冬は無理ということでも小豆島の祖母の家への疎開をきめたのだが、疎開のよい一例が出た例。

「寒椿」(A―児童・美根子もの) (昭20・2「少女の友」)は東京郊外に住む一家の銃後の生活を日記の体裁で描いている。父は亡く、母はリユーマチで起居が困難、兄は勤めで弟は疎開中なので、今年女学校を出た十八歳の美根子が主婦と介護と兄の代わりに隣組防空群長を誠心誠意勤めるけなげな働きぶりを描いて戦争末期の東京郊外の生活を覗かせてくれる。

七

「石臼の歌」(昭20・9・1「8月―9月合併号」)「少女倶楽部」は発表の日付から言えば戦後になるが、「8月―9月合併号」となっていて境目になるのでここでとりあげることにした。

敗戦直前の八月三日、広島から従妹の瑞枝(初出のみ最初に出た時、「たまえ」とルビがある。しかし初版以後は全て「みずえ」とルビがつけられているので、「みずえ」とした。)が母に連れられて小豆島の千枝子の家に疎開してくる。それまでに千枝子は祖母のひきうすの相手をさせられてうんざりしていた。叔母は五日に島を立ち、六日の早朝に広島に着き、一家は全滅。石臼の前で精も根も尽き果てたとショックを隠さない祖母に代って千枝子がひき始めると瑞枝が手伝い、「勉強せえ。勉強せえ。辛いことでもがまんして」と白が歌いはじめる。

「石臼の歌」は学校の教科書に教材として採用され、しかも原爆をとりあげた作品として最も早い時期に属するもの一つとして高く評価されている作品である。

この作品の急所は、おばあさんの言う「白はその時その時の人間の心もちをそのまま歌い出すものだよ。」というところであり、だから「団子がほしけりや白まわせ。」「団子がほしきぞ白まわせ。」と歌い出すのであって、作品の末尾で白が「勉強せえ、勉強せえ、辛いことでもがまんして。」と歌い出すのは「同時代に生きる同胞へ、明るい未来のために、勇気と励ましのメッセージを送ったもの」¹⁰なのである。

ところでこの作品について最近新しい事実が一つ明らかになった。それはこの作品がGHQ(連合国軍総司令部)の検閲によって削除と改稿を余儀なくされていたことである。¹¹

既に記したように、この作品の初出は昭和20年9月1日大日本雄弁会 講談社発行の雑誌「少女倶楽部」(8月9月合併号、23巻6号)で、そこでは原爆についての記述は、

瑞枝がお家の人たちと別れて、はじめて迎へた朝でしたが、それはこんな楽しい朝だったのです。しかもその時、瑞枝の両親たちは、戦争の生んだ広島悲劇の渦の中で、人人の思ひもおよばない苦痛を身にあげてゐたとはどうして考へられませう。あの世界を驚かせた原子爆弾が、この日広島に投下されたのです。そのことの真相を、千枝子たちはずっとあとまで、よく分からないままで、ただ心配をつづけてゐました。そして、いよいよ瑞枝の一家が、広島の方くさんの市民たちと共に、悲しい運命におしつぶされたとわかつたとき、千枝子の一家は急に言葉も出ないほど

の悲しみにうちひしがれました。(原文のまま、旧かなづかいで引用)

このように表現されていた。しかし、連合軍の占領下にあった時期においては「原子爆弾」に関する記述は一切タブーであり、このような表現が許される筈はなかったのであるが、それが検閲の目をスルリと抜けてしまったのは、占領軍が検閲体制を構築するよりも前の、余りに早い時期に発表されてしまったことによるものと考えられる。

壺井栄や夫の壺井繁治が広島に「新型爆弾」が投下され、「相当の被害」があったことを知るのは八月八日の朝日新聞朝刊¹²であり、更にそれが「原子爆弾」であると判明するのは八月九日朝日新聞掲載の「原子爆弾の威力誇示」におけるトルーマンの放送演説¹³であったことは繁治の証言¹⁴に明らかである。トルーマンはそこで

一、日本国民は米国の原子爆弾が如何なる威力を発揮するかを目の辺りに見た、もし日本が降伏しないならば米国は今後も引き続きこの爆弾を日本都市に投下するであろう。

と言い、「原子爆弾」とはつきり書いていた。

ところで問題はそのあとに起る。初出發表時には、僥倖にも未だGHQの支配体制が未整備であった(例えば、連合軍先遣部隊が初めて厚木飛行場に到着するのは昭和20年8月28日であり、GHQ本部が東京日比谷の第一生命ビルに設置されるのは9月15日。従ってそれより少なくとも半月前の9月1日には初出誌の「少女倶楽部」は既に発行されていた)から、いわばフリーパスに近い状態であったが、一旦体制が整備されると締め付けは厳しく、殊に原爆関係の発表には厳格であった。

そのため、「石臼の歌」を含む童話集『十五夜の月』(昭22・7・10 愛育社)を出版する話が始まった時は、原爆関係の記述が削除乃至改稿されるのは当然という雰囲気であったと推定される。そこで手直ししたゲラをGHQに提出すると、「原爆に関する部分は『delete (削除)』と書き込まれ、削除部分に替えて瑞枝らが楽しく過ごす部分¹⁵が書き加えられた。」

そしてこのゲラは、GHQ参謀Ⅱ部で歴史部長を務めたアメリカ、メリーランド大学のゴードン・プランゲ博士が持ち帰った約80万点の「プランゲ文庫」の中にあつたのを、北星学園女子短大の谷暎子教授が発見した。

八

ここでは参考までに初出と、削除改稿された初版の記述を次に引用しておくので、参考にしていただきたい(原文のまま、旧かなづかい表記で引用)。

瑞枝は、なつかしいおうちを心いつばいに思ひうかべてゐるやうなまなざしをしていひました。おい、一つパンを作つてくれよ、とお父さんの口調をまねたのがかしくて、みんなで笑ひました。

瑞枝がお家の人たちと別れて、はじめて迎へた朝でしたが、それはこんなに楽しい朝だったので。しかもその時、瑞枝の両親たちは、戦争の生んだ広島悲劇の渦の中で、人人の思ひもおよばない苦痛を身にあげてゐたとはどうして考へられませう。あの世界を驚かせた原子爆弾が、この日広島に投下されたのです。そのことの真相を、千枝子たちはずつとあとまで、よく分からない

ままで、ただ心配をつづけてゐました。そして、いよいよ瑞枝の一家が、広島のたくさんの市民たちと共に、悲しい運命におしつぶされたとわかつたとき、千枝子の一家は急に言葉も出ないほどの悲しみにうちひしがれました。しかし、小さな瑞枝がただしくしくと思ひ出しては泣いてゐる姿をみては、かはいさうであまり泣くこともできませんでした。

「しかしまあ、瑞枝一人でも残つてくれたことは、不幸な中にもよかつたよ。」

たつた一人の弟をなくした千枝子のお父さんがそうおつしやると、お母さんは瑞枝をうしろから抱くようにして

「ほんとよ。瑞枝ちゃんは今までよりも、もつともつと大事なからだになつたのよ。これからは、ここを自分のお家だと思つて、よく勉強するのね。」

瑞枝は、だまつてうなずきました。

(昭和20・9・1「少女倶楽部」)

瑞枝はなつかしいおうちを心一ぱいに思い浮かべているようなまなざしをして云いました。おい、一つパンを作つてくれよ、とお父さんの口ぶりをまねたのがおかしくて、みんなで笑いました。

お庭に縁台を持ち出して、そこで食べる朝の食事も、これが瑞枝さんのよ、と決めてくれたお茶わんの梅の花の模様も、柿や栗の青葉の繁つたお庭の景色も、何もかも珍しくて瑞枝はもう、うきうきしていました。もうすぐお盆がくる。おぼんの朝はまだ夜が明けないうちに起き出して、村中の人々が、一ばんいい着物を着てお墓まいりにゆく話や、この日お寺では地獄ごらくの絵を描いた宝物の六

枚屏風が、本堂に出されるので、みんなそれを見にゆく話など、千枝子たちの話は瑞枝にとつて何一つ珍しくないものはありませんでした。瑞枝がおうちの人たちと別れて始めて田舎でむかえた八月六日の朝はこんなに楽しい朝だつたのです。その時、広島のお家が消しとんでしまつて、瑞枝のお父さんもお母さんもうなつたか分からなくなつてしまつたなど、どうして考えられたでしょう。空のよく晴れた朝でした。瑞枝たちと同じように瑞枝のお父さんやお母さんも、きつと何にも心配などなさらないで、晴れた朝を迎えたにちがいありません。しかしお父さんもお母さんも、今はもうどこをさがしてもいらつしやらないのです。どうかすると泣きそうになる瑞枝を、千枝子たちは一生けんめいなぐさめしました。

「二人で仲よく勉強しましょうね」

瑞枝はだまつてうなずきました。

(昭和22・7・10『十五夜の月』愛育社 所収)

九

さて最後になつたが、さきほど長篇なのであとまわしにした『海の花ましい』(かきおろし。初出原題は「海の花ましひ」。昭和一九年六月一四日大日本雄弁会講談社から「少国民の日本文庫」〔国民学校上級・中等学校初中級向〕の一冊として刊行され、表題の勇ましいタイトルは作者のあずかりしらないところで、編集部によってつけられたものと栄は言うが、後述するようにこの作者の言はこの作品の的中味によって首肯することができるであらう。)は著者はじめての書きおろしで、初版は六千部であつた。

『海のたましい』以前に栄は前述したように随筆集二冊も加える
と、単著だけで既に十冊の本を出している（昭和15・3・19・2ま
での短い期間である）程の売れっ子ぶりであったが、書きおろしで
一冊刊行するというのは初めての経験であつただけに慎重を期して、
信州のひなびた上林温泉に昭和十八年の夏中こもつて書き上げた。
栄はこの温泉に昭和11年の秋に宮本百合子の静養のお供をしてきた
のが初めてで、その時は、せきや旅館。これが大変気に入つて翌年
二月には一人でまた来たが、三回目の今度は林芙美子の紹介で塵表
閣の離れにした。芙美子の夫縁敏と宿のおかみが幼友達であつたか
らで、戦後はこの宿から紹介された山の湯旅館が夏の仕事場になつ
た。

栄には一度発表したものを後に全面的に手を入れて改稿し、表題
まで変更してしまう作品が珍しくない。思いつくままにあげてみて
も次のような作品がある。

「海のたましひ」↓「柿の木のある家」 「海辺の村の子供たち」
↓「母のない子と子のない母と」 「孤児ミギー」↓「右文覚え書」
「童話のある風景」↓「りんごの袋」 といったぐあいである。

しかも従来は単に「……」の改作（改稿）として殆ど何のこたわ
りもなしにすませられてきてしまつてゐるために、そこには何の問
題も存在しない、少なくともそこに何らかの問題を指摘して論じた
ものがなかつたことは確かである。

しかし果してそれでよいのかどうか、そこにはどういふ問題があ
るのか―改稿（改作）の問題についても具体的に考えてみることに
したい。

「海のたましひ」は全11章から成り、物語の舞台は栄の出身地で

ある小豆島の坂手村と明記されている。この本はたやすく手に入る
本ではないので簡単に内容を紹介しておく第一章「もち草のほ
ひ」では坂手村の洋一（小学校三年）一家が紹介される。家族は姉
のフミエ（小五）母（臨月の身）それに祖母の四人で、父は貨物船
の機関長であつたが、今はその船が軍用船となつたために殆ど家へ
は帰らない。折から三月末の春休みで姉弟と祖母の三人でヨモギ摘
みに行く。二章の「花の村」では四月三日の雛祭には桃の花と柳の
枝で家々の軒を飾るのが村のならわしでフミエはその桃の花を農家
の三太郎おじさんの家にもらいに行き、ついでに村で一番おいしい
引手のみかんもプレゼントされる。三太郎おじさんは母の弟で、そ
の妻であるおばさんは父の妹になる。つまり父と三太郎おじさんは
それぞれの姉妹と夫婦になつたわけで、子供がないところからフミ
エと洋一を我が子のようにかわいがつてゐる。三章に入つて、洋一
の家には村一番のうまくて大きい柿の木があつて、三太郎おじさん
はそれには目がなく、いくつでもお腹に入れる。農家なので果物の
なる木は何でもおじさんの家にはあるが、柿だけはない。それは昔、
柿を食べすぎて疫病で死んだ子供があり、悲しんだ祖父が孫の仇と
伐つてからはいくら柿を植えても育たないからだという。

ところで洋一の祖父は丈夫だつたが、昨年の五月に急逝したのは、
前年井戸を掘る時に使つた石の残りをくだんの柿の木の根元に、うつ
かりおいたためにそれが障つて柿の花がつかず、慌てて重い石をと
りのける作業中に脳卒中で倒れたのだつた（以上「柿の木のう下」）。
父から電報が来て帰宅するというので姉弟は三太郎と港に迎える。
帰途三太郎は赤ん坊が生まれたら家へもらいたいと頼むが姉弟は反
対する（「小さなあるじ」）。夕飯の際父のいる時に明日祖父の一周

忌もすることになり、祖母は三太郎家に家の子を一人はやらないと血筋が絶えると言ひ、母は父がいる時にきちんときめることをもとめるが父はあわてなくてもいい、万一のことがあつてもここに次のあるじがいるからと洋一を抱く。父は生まれてくる子は男なら日出海、女ならヨシ子と命名するよう言い置く。法事の日には船乗りだった祖父の話がいろいろ出た中で、洋一は三歳位の時から祖父に水泳を教へてもらつた事を思い出し、自分の体内にも「船乗りのたましひ」があることを自覚する（「海のためしひ」）。母が今夜生まれるかもしれないといつた翌朝双子が生まれていて姉弟は驚く（「ゆびきり」）が、日出海と新之助（こちらは三太郎が命名し、うちに貰うと洋一をからかうとムキになつて反対する）と名付けられ、育児にテンテコ舞いの一家を三太郎夫婦は毎日来て手伝ひ、乳の足しに母山羊も買つてきてくれたのを見て洋一は新之助を三太郎にやつてもいいと言ひ出す（「山羊にひかれて」）。三つ四つの中から祖父に海で育てられた洋一は、やがて弟達が三つになつたら二人に泳ぐ稽古をつけてやろうと思う。いわし漁の網引きを手伝つて昨年は朝網で一円二五銭もらひ、今年は晩網に出て一三六〇銭もらう。願かけ樽を拾ひ、祖母からそのいわれや人形浄瑠璃の一座の話や聞く（「海のものごと」）。フミエは父にあてた手紙の中に洋一たちの出征同盟や近況を報じ（「柿の実はなせ赤い」）、秋になつて近隣五カ村の氏神である八幡様の祭礼が、支那事変以来質素になつていたのが、久しぶりに賑やかに催されるというので、洋一たちは喜んで見物に出かけ、鳩笛を買つて土産とし、慰問袋にも入れることにする（「鳩笛」）。父から姉弟に手紙があつて双子の誕生を喜び、慰問袋の礼のあと万一の時には後を頼むとあり、それから間もなく父の船が

沈没し、行方不明の知らせが入る。洋一は将来は日出海と共に船で働き、二人で父の沈められた「海をにらみつけて」こようと思う（「冬きたりなば」）。

十

この作品の特徴は第一に作者自身の故郷小豆島の坂手村という固有名詞をもつた村を舞台にして、春から冬へのほぼ一年の時間の中に、そこに生きる洋一一家を中心にして描いた物語と言つてよい。舞台に「坂手村」という固有名詞を敢て用いたのは、自ら愛してやまない故郷という特別の思いがあることは確かだが、それ以上に初書きおろし長篇ということ、おのれが最も熟知している場所にそれを設定して存分に腕を揮いたいという内的要請が最も大きな理由だったのでないかと考えられる。

第二に物語は洋一一家を中心に展開するわけであるが、それは単純な、直線的なものではない。無論、中心となるのは洋一で父不在の一家の「あるじ」として、土地のさまざまな行事や風習、双子の弟の誕生という事件、叔父夫婦との交流、祖父の訓育と船乗りの血の自覚、父の戦死等々の事件、あるいは経験を契機として次第に成長してゆくわけで、その意味では経糸としての所謂事件（父の帰郷、一周忌、双子の弟の誕生、父の死）よりも、緯糸としての風習や行事、村人や叔父との交流が彼の心に与える影響の方がより大きいと言つてもよいであろう。

第三にこの作品で重要なのは右に指摘したように洋一一家を襲つた事件ではなく、緯糸として至るところに織りこまれた土地の四季

折々の風俗・習慣・行事の豊かさである。それは同時に人の心へはじめをつけ、リフレッシュする知恵をもつものであることだ。

第四に老人の重要性も指摘しておかねばならない。祖父の回想に現れる洋一への訓育やまるで兄弟に寄せると同じようであった柿の木への愛情があり、祖母の場合には、双子誕生という事実に当惑している姉弟に対して「なにしろふたごといふものは、かはいいもんでなう。おかあさんはごくらうぢやけども、楽しみもまたふたつぢや。そろひの着物きせてなう、大きくなつたら、そろひの下駄をはかせてなう。そろひのおもちやを買ってやる。二人そろひで歩き出して、そろひで学校へもゆく。そろひで大人にもなる。えめらしいぢやないか。」というふうに語りかけることによって二人の心を開き、「ほんとにかはいく、ほんとにめでたく、ほんとにうれいこと」と納得させるに至るのである。

これに対して、戦後に改稿された『柿の木のある家』（昭和24・4・20『柿の木のある家』山の本書店）はどう改稿されたかというところ「海のたましひ」のうち、「柿の木の下で」「ゆびきり」「山羊にひかれて」の各一部を修補し、それに「柿の実はなぜ赤い」の一部に、今日新之助が三太郎の家にもらわれてゆく部分をつけ加えている。つまり内容的には村一番の柿の木の話と双子の一人がもらわれてゆく話に限定され、「海のたましひ」全体の約三割弱に縮小されている。

無論、小豆島や坂手村等の固有名詞はないし、風俗習慣は全部捨てられている。

換言すればこれは「海のたましひ」の縮小版というのではなく、全く別の作品である。

何故なら「海のたましひ」のもつ特徴として指摘したものは全部スッポリ脱落しているからである。

これを単純に改稿というのは甚しい誤解を招くもので、そういう言い方は今後やめるべき事は明白であろう。もし改作を使うとすれば「海のたましひ」の一部を改作して「柿の木のある家」を書いたとでもすべきであろう。

同様のことは本稿の冒頭に掲げた「母のない子と子のない母と」「右文覚え書」「りんごの袋」にも実は言えることであって、そこでは主題、作品の性格、児童文学か否かという問題にも当然かわっていくわけで慎重に検討を要する課題であることを言っておきたい。紙数の制約からふれられなかったが、一言念の為に言っておけばこの「海のたましひ」には無論戦争下の時代的制約はある。しかし戦争協力があっても露骨な鬼畜米英式の無益な殺し合いの奨励などがないことは次の一事に明らかである。即ち、作者は洋一に、父の船が沈められた海にいつか弟と行って、憎い父の仇に復讐するとか、報復するなどという一切言わず、ただ「海をにらみつけてくる」とだけしか言わせてはいないからである。

（この章 未完）

注

- 1 宮田節子「はじめに」（宮田節子・金英達・梁泰昊『創氏改名』92・3・31 二刷発行 明石書店）
- 2 金英達「創氏改名の制度」（同上書所収）
- 3 宮田節子「創氏改名の実施過程」（同上書所収）
- 4 梁泰昊「創氏改名」の思想的背景」（同上書所収）

- 5 宮田節子『創氏改名』研究の意義と課題（同上書所収）
- 6 栄「駆け足でみた朝鮮」（昭16・10「少女画報」、同「朝鮮の旅」（昭16・11「大陸」、同「朝鮮の追憶（のち「朝鮮の思い出」と改題）」（昭17・1・5「文化朝鮮」）。
- 7 栄「種」（昭16・3「文学者」）。
- 8 「『餓鬼の飯』鑑賞」『鑑賞現代日本文学35児童文学』（昭57・7・31角川書店）
- 9 江藤淳「壺井栄さんを悼む」（昭和42・9「小説新潮」）
- 10 田中実「内奥を描く方法―『石臼の歌』（『壺井栄全集10巻月報（小豆島10）』98・10・15 文泉堂出版）
- 11 中野彩子「原爆記述 GHQ削除―被爆を初めて取り上げた壺井栄「石臼の歌」（01・9・1「毎日新聞大坂本社版」一面トップ記事）
- 12 壺井繁治「敗戦の日と夜」（『激流の魚―壺井繁治自伝―』74・4・15 立風書房）。
- 13 注12に同じ。
- 14 注12に同じ。
- 15 注11に同じ。
- 16 注11に同じ。